龜谷行著 和漢俳諧 五

修
第 血 號
共 拾 冊
年 月 日 備付

K110,1
190
4

# 和漢脩身訓卷五

龜谷行著

## 第一章

○天祖統を垂れ。天孫繼承し。三器を奉ず。以て宇内を照臨し。皇統緜緜として。天壤と窮りなく。實に天祖命ぜる所の如し。是神州の萬國に冠たるゆゑん。君臣の義。尤重ぜ所なり。藤田幽谷語及門遺範

國民精神文化研究所
24225
漢

○君王ニ忠し。父母ニ孝し。師長を尊ミ。夫婦和し。兄弟友ホ。朋友信あり。親族ニ篤く。鄉黨ニ睦し。此數の者ハ。人倫の根本なり。須らく逐一ホ力行を盡し。若ク近を舍て。遠キニ求め。本を棄て。末を務むるハ。善とせるニ足らズ。願體集

○孝弟を以て本と為し。忠義を以て主と為し。廉潔を以て先と為し。誠實を以て要とし。事ニ臨ミて。人ホ一歩を讓らバ。自ら餘地あり。財ホ臨ミて一分を放寛ゼバ。自ら餘味あり。明高忠憲語易知編

○毎日夙ニ起き。家庭を掃除し。先ッ父母の氣色を候ひ。飲食の好む所を問て。之を進め。求むることあらバ。之を奉じ。勉免て其歡心を盡セべし。貝原益軒語

○子ハ。親を悅ばセを以て孝と為セ。家

ハ窘迫せとも。父母の面前ニ在りて。窮を愁へ。苦を說く。屈のらぬ。亦是志を養ふの一節あり。易知編引身世準繩

○高年の人。事を作せこと。嬰孺の如きあり。錢財の微利を得るを喜び。飲食果實の小惠を喜び。孩兒と玩狎せるを喜ぶ。子弟ニ。能此を知りて。其意ニ順適せむ。其歡を盡せ屈し。袁氏世範



○家庭の内。兄弟の間。和氣以て祥を致せ屈し。而して和を致せの法。唯容忍ぶ ハ在り。見きども。見ざるヲ如く。聞ども。聞のざるヲ如くあきバ。小忿小利。自らいて之を動ハ足らぬ。願體集

○父母遺せ所の幼弟ハ。兄長ニる者。之を撫づること子の如く。曲さニ其飲食教誨の事を盡し。之をして成立ハ至ら

忘むべし。幼弟の長兄を待ふに至ていに之ふ事ること父の如く。決して其撫養教育の恩を忘るべからず。易知編引身世準繩

○父母い。諸子の中。獨貧き者あるをば。往往之を念ひ。常に憐恤を加へ。飲食衣服の分ち。或む偏私をる所あり。子の富める者。或い獻ぜる所あれむ。轉じて以て之に與ふ。此乃父母均一の心なり。子は



富める者。或ハ以て怨と為をい。未之を思むばる也。若我をして貧からしめば。父母亦此心を。我に移さん。世範

○骨肉の歡を失ふい。至微に本き。終に解くべからざるに至る者あり。是歡を失ふは後。各自ら氣を負ひ。肯て先づ氣を下さざるに由るなを。朝夕群居して相失ふこと無き能むぞ。相失ふは後。一人

能先づ氣を下し。之と話言せバ。彼此應答。遂よ平時の如くあらん。同上

○古より。人倫ハ賢否相雜むる。或ハ父子みな賢あらば。或ハ兄弟ともに令のらず。或ハ夫流蕩し。或ハ妻妒婢あり。一家都て此の患あき者あし。譬へバ身よ瘡痍疣贅あるが如し。甚惡むべしと雖も。決して去る能のらぬ。惟當よ寛懷たれを處し。從容ときを喻せべし。畜德録

○人。其兄弟叔姪及び婚姻親黨の間よ於て。猶私意を以て之を行ひ。陰謀詭計。利を己よ求む。禍を得ること最速あり。蓋人の不仁。是み至りて益甚し。抑人を利せんことを思ふ者ハ。人恒み之を利し。人を害せる者ハ。人恒ホ之を害せ。他人尚爾り。況して所親をや。張揚園訓子語

第二章

○今人の病痛ハ。只是一箇の傲の字。千罪百惡皆傲より生ぜ。謙抑ハ。乃是對症の藥なり。謙抑ハ。但外貌の恭敬のミならず。其自ら視ることと欿然。已不足の處あり。不是の處あるを見て。纔よく。已を虛くして益を受く。明王陽明語

○余毎ゑ寒士の將ゑ達せんとするを見るゑ。必一段謙光の氣あり。恂恂欵欵として。敢て人ゑ先だゝず。或ハ侮を受けて答へず。或ハ謗を聞て辯ぜず。人之を見て。愛ゑ敬ゑ。敬ゑ畏し。明袁坤儀語習是編

○人の病。好て其長を談ずるゑ在り。功名ゑ長ぜる者ハ。動もゑ言バ。輙功名ゑ誇り。文章ゑ長ぜる者ハ。動もゑ言バ。輙文章ゑ誇る。此皆其長ぜる所を露す。

其長ぜる所を養ふ能はざる者あり。唯智者言むず。故ふ能く其長を保つ。明王耐軒語畜德録

○人の短を説きて。己ゞ短ぢ護し。己ゞ長ふ誇りて。人の長を忌む。皆心を存ぜるの厚からば。識量の太狹きに由るなり。よく此弊を去らば。以て德ふ進むべし。穀詒彙引省心集要

第三章

○毀譽榮辱の來る。獨以て其心を動かさゞるのみならば。且之を資り。以て切磋砥礪の地と為れ。故ふ君子は。入ると雖て自得せざることなし。若譽を聞て喜び。毀を見て戚まば。其何を以て君子と為さん。王陽明語

○凡遭ふところの患難變故。屈辱讒謗

拂逆の事ハ。皆天の吾ゞ才を老しむる也。忍ん。砥礪切磋の地とあらざるハなし。君子當よ之を處する所以を慮る歟し。徒らに之を免まんと欲るハ。不可なり。佐藤一齋語

○凡大硬事ゑ遇ずゞ。急よ剖決する夫とを用ゐぞ。姑之を舍く歟し。一夜枕上ゑ於て粗之を商量し。思を齎らして寢ね。翌旦清明ゝ時ゝ及て。續いく之を思惟せむ。必恍然として。一條の路を見て。義理自然ゝ湊泊す。

然る後徐ろに之を區處せきば。大概錯悞を致さじ。同上

○事を處する。最熟思緩處せ屋し。熟思せきば。其情を得。緩處せきば。其當を得。最輕忽忙亂せべらじ。至微至易の者と雖も。皆慎重を以て。之を處せ屋し。習是編

○凡人の事を謀るや。日用至微の者と雖も。亦齟齬して成り難く。或い幾ど成て敗き。既に敗れて復成る。然る後其成るや永久平寧。復後患なし。もし偶然成り易せけきむ。後に必ず意の如くならざる者あり。此理を静思せむ。以て懐を寛くせべし。世範

第四章

○文中子曰く。家を御するに。四を以て

教ふ。勤儉恭恕と。夫き勤むきむ功あり。儉かきむ用を足し。恭なきバ侮らレ。恕なきむ怨かし。この四の者ハ。一を缺く。亟らレ。名門右族も。祖先の勤儉恭恕ふ由り。以て之を成さゞるハ莫く。子孫の怠頑奢傲ふ由り。以て之を敗らざるむ莫し。故ふ家ふ教ふる者む。恩を以て義を廢すべらず。（穀詒録）



○興盛の家。長幼和協多し。蓋求むる所皆遂げ。爭ふ所かけきむ也。破蕩の家。妻子未嘗て過あらレ。而して家長毎ふ責め罵ること多し。此他かし。衣食給せレ。怨を積て發する所かし。惟妻子の間ふ施すべきのミ。妻子能此を知らバ。尤當ふ奉承す亟し。（世範）

○主人ハ一家の模範かり。我能勤めむ。

衆何ゾ敢て惰らん。我よく儉ならべ。衆何ゾ敢て奢らん。我よく公ならべ。衆何ゾ敢て私せん。我よく誠ならべ。衆何ゾ敢て偽らん。願體集

○家の主さる者ハ。其身を修め。其家を興すを以て志とし。父祖の遺産を失ハざるを以て孝と為す。天災よりて。財産を失ふハ人力の能く及ぶ所



ゟ非ず。己レ不肖ふして之を失ひ。或ハ之を減耗するハ。大なる不孝と謂ふ。貝原家道訓

○主人の奴婢を使ふ。常ゟ禮法を嚴くすべし。禮法忽せ有べ。侮りて罪を犯し易し。故ふ彼をして侮らず。怠らしめざるを要す。然れども。不慈ふして。彼を苦むべからず。同上

○權家の奴僕ハ。主人の權威を挾ミて。賓客を侮り易し。主人ゝる者。心を用ゐて無禮を戒むべし。賓客或ハ之を惡ミて。其主人を誹る小至らん。家道訓

○明の陳確修曰く。此輩唯智慧かし。故小奴僕とかる。若亦智慧あらバ。下賤と為らぞと。此を以て心ゝ存せむ。自ら苛求せるゝ至らじ。丹桂籍

○祖父遺せ所の老僕。多く世故を閲歴し。事情を諳練し。能幼主の為めゝ力を出せ者あり。宜く之を厚待せ爾し。疾病あらバ。尤體恤せ爾し。其耄老ゝ因りて。厭惡を生ぜ爾ゝらじ。易知編引虞衡候言

第五章

○周武王の鑑乃銘小曰く。爾前を見て。後を慮る。真西山曰く。鑑ハ甚だ明か

りと雖も。面を見て。背後見ず。猶吾が一心明かる所あるも。亦蔽ふ所あるが如し。患ハ常ゐ照察に及むばる所ゑ伏し。過ハ常ゐ思慮の周らざる所ゑ生じ。故ゐ聖人と雖も。常ゑ之を憂ふ。初學知要

○司馬温公曰く。夫れ儉ふまむ欲寡し。君子欲寡れば。物ゑ役せらまじ。以て道を直くして行ふ能し。小人欲寡けまむ。能身を謹み。用を節ふし。罪ふ遠ざかり。家を豊ゑに。侈れば欲多し。君子欲多ハまむ。富貴を貪り慕ひ。道を枉げ。禍を速く。小人欲多け求むず。求多く。用を妄りゑし。家を敗り。身を喪ふ。同上

○一切の事。倶ふ儉朴誠實を要に。浮華を學ぶ能ずらず。蓋し浮華ハ一時を光耀すと雖も。究ふ實事ふ益ふし。人の名を

敗り。禍を得る者。都て奢侈の致す所より由る。知世事

○凶人貪冒。恥ること無く。處より隨て必ず小利を占めんと欲し。人も亦之を畏る。獨り怪む。終身占望る所の小利。必ず一事を以て。盡く之を喪ひ。更に其占めし所の數より過ぐ。吉人は分を守り。理に循ひ。敢て妄りに為さず。人亦之を欺き。之を侮る。然きども冥冥の天。必ず將に大福の事を以て。之を補はんとす。或い其身より及び。或い其子孫に及ぶ。往轍を歷觀せるより。然らざる者稀し。人生必讀書

○過ちを改むる者い。第一恥心を發せることを要す。思ふに。古の聖賢も。我と同く丈夫なり。彼何を以て。百世師とすべく。我何を以て。一身瓦裂せ。私りに不

義を行ひ。人知らぬを謂ひ。傲然として愧ることを無くべ。將さに日に禽獸に淪して。自ら知らざらんとす。丹桂籍

○老成人。事を更ることを多くとして。後生。天資聰明なりと雖も。見識終に及むざることなり。後生。都て老成を以て迂濶とし。其規誡を聽くことを厭ふ。後生年齒漸く長じ。事を歷ることを漸く多きに及て。方に老成の言。以て佩服すべきを悟る。然きども。已に險阻艱難。備さに嘗めし後に在り。世範

○人生世に於て。未だ心力を勞せざる者あらば。或い心を勞して。力を勞せば。或ハ力を勞して。心を勞せば。若し心を勞せば。まさに力を勞せざべ。乃ち饑芋無用の人なり。紳瑜

○疎懶ハ。第一事を害ス。一旦。脉懈リ筋弛めバ。便チ生を謀るも。亦恐らくハ給せじ。何ぞ況んや其他をや。故ニ凡志ある者ハ。決して空間の日月あらしめじ。易知編引座右編

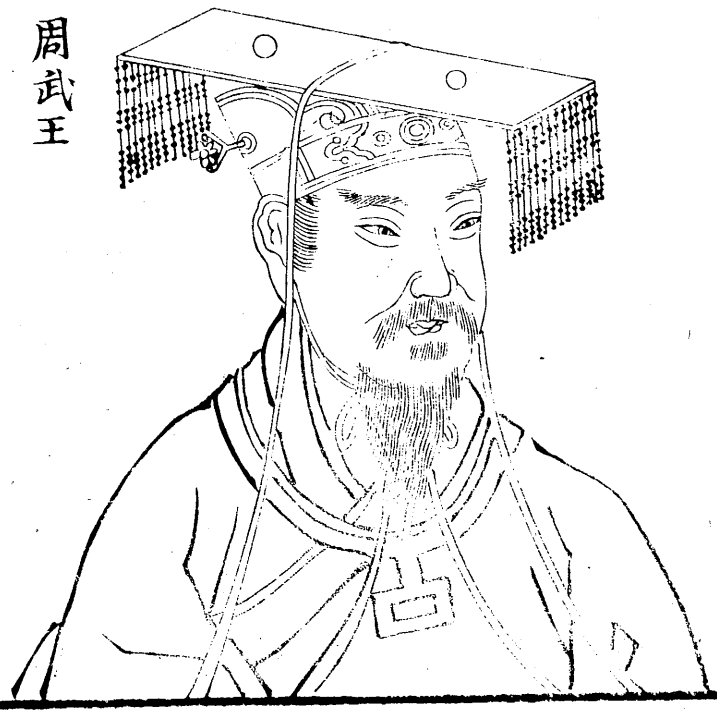
## 第六章

○程伊川曰く。近世人情淺薄。相歡狎セるを以て相與シとなし。圭角ふきを以て相歡愛セと為セ。此の如き者。安んぞ能ク久しからん。若ク久ク敬を要せむ。須らく是恭敬ふる歟し。君臣朋友。皆當ニ是を以て主と為セ歟し。古學彙纂

○人と相處る。情投し意合ふとも。亦狎るゝこと。甚うセ歟ならじ。笑語戲謔の際。必ず當ニ節ある歟し。易知編引心鑑録

○德盛んふる者ハ。その心和平。人皆交

るべきを見る。德薄き者む。其心刻傲。人皆鄙むべ如を見る。人を觀る者。其許可する所多きを者き



周武王

む。其德の厚きを知り。其許可する所の少如找者れば。其德の薄きを知る。人生必讀書

○聖人の心。唯人の惡ふ入らんことを恐る。故ふ人の惡を言ひ。以て惡事を為さの念を動さことを欲せば。唯人の善ふ入らんことを欲さ。故ふ毎よ善事を稱述し。聞く者をして欣慕して。之よ效ハさむ。明王少湖語易知編

○凡人乃君子ニ近づかて。小人ニ遠ざからんと欲する者ハ。君子の言。多くハ長厚端謹なり。此言先吾ゞ心ニ入きむ。事ニ臨むニ及び。自然ニ長厚端謹ニ出づ。小人ハ言。多くハ刻薄浮華なり。此言先吾ゞ心ニ入きむ。事ニ臨むニ及び。自然ニ刻薄浮華ニ出づれバなり。世範

○明の孫子度曰く。天下極て詐り。極く



険なるの人ハ。吾至誠を以て之を待さバ。其険詐も。將ニ用ゐる所なからんとす。而して。亦相感ドて。以て誠ならん。君機智を以て之を禦ゞむ。愈其潰決を甚しくする也。張揚園集

○凡人を諫むる。遽ニ其過を指摘ならば。必ず須らく先づ其長を美する。蓋人喜べハ。言入り易く。怒きハ。言入り

難し。格言聯璧

○天下よ全才ふし。此よ長ぜる者ハ彼ハ短し。備らんことを一人よ求むること勿き。如其短き所を惡ゝて其長ぜる所を忘れむ。是を才を棄とおも。故よ人拔用ぬふい。一善を廢せば。一才を捨てば。然きども佞奸凶惡ふる者も。才能ありと雖も。亦君子ハ容まざる所ふり。貝原

益軒語慎思録

○諂諛の言ハ。耳ハ入り易し。人諂諛を以て我よ進むる者も。未必しも正人ふらば。彼將よ我よ取ること有らんとも。る也。宜く意を加へく。之を防ぐ。規諫の言も。耳よ入り難し。人規諫を以て我よ進むる者ハ。此誠よ君子ふり。彼實ハ我よ益あり。宜く細心之を聽くべし。

願體集

○我が過を攻むる者い。未だうからばし。も皆過おきの人ならば。苟くも過おき吏れ人。我を攻むる我求めむ。終身過を聞くことを得ば。我當さよ其我を攻むるの益よ感ぜ盈ぬのこ。彼が過あると。過おきと。何ぞ計るよ暇あらんや。呻吟語

○直友む得難し。而して吾又拒むよ。過を諱むの聲色を以てす。佞人少からぜ。而して吾又接ぜるよ。諛を喜ぶの意態を以てぜ。嗚呼。日く不惡よ入らざらんと欲ぜるや難し。同上

○死友れ過を彰ぜい。此む是第一れ不仁なり。生て之よ告ぐるや。其能改むるを望ぜ。彼之我聞ふ及ぶや。尚よく自ら白ぜ盈し。死して之を彰ぜいい。何の為

ぞや。實過ありと雖も。吾。為めゝ之を掩む。（同上）

○明の胡師蘇曰く。人。過失ありて。其の改悟せんことを欲せば。只宜しく静僻の處に於て。面のあたり其人と。委曲之を言ふ可し。我が口を出て。彼が耳に入り。方に是相愛し相成るの意あり。彼も亦感ぜべし。若他人に向ひ。聲揚已まば。

或い衆に對して面責せむ。彼必樂まぜ。且或も強辯して從ずむず。（畜德録）

○王陽明曰く。昔人言ふこと有り。何を以て謗りを止ん。曰く辯ぜる無きと。故に其事あらむ。辯ぜ可らば。其事無くば。必ずしも辯ぜず。其事ふくしく之を辯ぜるむ。是自ら謗る也。其事有りて之を辯ぜるも。是已が惡を增しく。人此

怒を甚しくする也。皆自ら修免て。物故平のようする所以よ非ず。同上

○忿怒の際。人ハ隱諱の事を指て。其父祖の惡を暴むを可らぞ。吾ガ一時怒氣の激する所。必ズその切實を指く。之を言むんと欲ル。知らぞ。彼の怨恨。深く骨髓よ入るを。古人謂ふ。人を傷むるハ言む。矛戟より深しと。同上



○親族隣里ハ。居處甚ダ近し。凡ソ養畜の侵害する。僮僕の爭競する。言語行事の錯悞する。孰ヒ免るゝこと能むぞ。但己よ反省し。人を責むることなくんむ。能ク交を久しくする。若遽ちよ嗔怒を生じ。彼此俱よ相下らざるときむ。仇怨終よ了る時なけん。習是編

和漢脩身訓卷五　終

明治十五年三月廿八日板權免許
同年　六月十日出版
同年　九月十八日再版御届

十四枚十八枚
内各一条改正ス

東京府士族
光風社長
著者出板人　亀谷行

東京神田區金澤町十一番地
大坂北久太郎町
同　備後町四丁目
同　本町四丁目
同　南本町
東京馬喰町
發兌人　柳原喜兵衛
梅原亀七
岡島真七
中近堂支店
石川治兵衛

定價八錢

龜谷行著

# 和漢倩身訓

六

修
第 虫 號
共 拾 冊
備付日 年 月

一号

共拾

K110.1
190
6